

第1分科会

【テーマ】

豊かな人間関係を育むための生徒指導は
どうあればよいか

【研究発表者】

地区	学校名	氏名
宮東	瓜生野小学校	外山 弥枝
	住吉南小学校	児玉 佳輔
西諸	上江中学校	山元 秀太

豊かな人間関係を育むための生徒指導はどうあればよいか

～ピア・サポート推進校の取組をとおして～

宮崎市立瓜生野小学校 外山 弥枝

I 主題設定の理由

児童を取り巻く社会環境は、少子化、コミュニティの弱体化等、大きく変化している。また、昨今の感染症予防への対応によって児童の生活環境の変化が引き起こした人間関係の希薄化、社会性や協調性、コミュニケーション能力の低下も懸念される場所である。また、文部科学省が公表する「児童・生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」からは、いじめの認知件数は年々増加傾向にあり、いじめや様々な悩みから「孤立・孤独」を感じ、不登校になったり、自ら命を絶ったりする痛ましい状況も大きな社会問題となっている。

このような状況の中、「小学生白書web版」によると児童が悩み事を相談する相手として、「家族」の次に「友達」を挙げている。また、いじめを止めてほしい人は、「友達」が圧倒的に多いことから、これからの時代を生きる子ども達には仲間同士が互いに思いやり、助け合い、支え合いながら、人間関係を育むピア・サポート活動の考え方を生かした生徒指導に努めることがいじめ・不登校等の未然防止につながると考える。

本校児童208名は、素直で、友達と仲良く活動できる児童が多い。しかし、ほとんどが単学級で、密接な人間関係を形成しやすい反面、人間関係が固定化され、無意識のうちに序列化が生まれ、感染症予防から学年の壁を越えて行う活動が縮小され、縦のつながりが希薄になったりすることが課題となっていた。

このような実態を踏まえ本校では、令和4年度からピア・サポート推進校として、ピア・サポート活動に取り組み、今年度で3年目を迎えた。子ども達の対人関係能力や自己表現力等、社会に生きる力が不足している現状を改善するために、学校教育活動の一環として、これまで全校で、ピア・サポートに取り組んできた。ピア・サポート活動は、子ども達相互の人間関係を豊かにするための学習の場を児童の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキルをもとに、仲間を思いやり、支える実践活動である。これは、やがて思いやりのある学級や学校風土を醸成することにつながる。このピア・サポートのねらいは、今回改訂された「生徒指導提要」において、4つの層からなる「生徒指導の重層的支援構造」の考え方のうち、最下層で基底となる「発達支持的生徒指導」に符合し、全ての児童の発達を支える積極的な生徒指導、先手型の生徒指導と言える。以上のことから、本校では、ピア・サポート活動の特徴を生かした生徒指導をとおして、豊かな人間関係を育むことをねらい、本主題を設定した。

II 研究の目標

ピア・サポート活動の視点を意識した生徒指導の推進により、思いやりを自然な言動として示せる児童を育て、豊かな人間関係を構築する。

III 研究仮説

日々の教育活動の中でピア・サポート活動を活性化させれば、児童がお互いを思いやり、助け合い、支え合う、豊かな人間関係を育むことができるであろう。

IV 研究の実際

1 「ピア・サポートとは」を広めるために

ピア・サポート活動に取り組むにあたり、まずは職員間での共通理解、児童への働きかけ（動機付け）が必要であると考えた。

(1) 職員間での共通理解

推進校となった1年目に、ピア・サポート指導者研修会に参加し、夏季休業中の職員研修で、ピア・サポートに必要とされる背景、理念、基本的な考え方等を周知した。また、県教育庁人権同和教育課より講師を招いて、実際のトレーニングを職員に紹介してもらい、演習をとおして今後の取組についてイメージがもてるようにした。また、配付された指導資料をもとに学級活動の年間指導計画に、児童の実態に合わせて3回、トレーニングを設定し、学校全体で取り組むようにした。2年目、3年目には、春季休業中に転入職員に対して職員研修を行い、早期に、共通理解を図った。また、夏季休業中には再度、講師を招き、これまで取り組んできた内容へのアドバイスをいただき、新たな方向性の確認や見直しを行った。その中で、既存の学校行事や取組とリンクしたサポート活動の計画が重要だった。そこで、各担当から提案される行事計画の中に、ピア・サポートの視点を取り入れるように提案し、ピアの視点を意識して実践していくようにした。2年目の職員向けの研修の中では、「ピア・サポートを取り組むに当たり不安な点」というグループスーパービジョンの演習を行い、トレーニングを体験するとともに、今後の取組内容への方向性を決めることにもつながった。

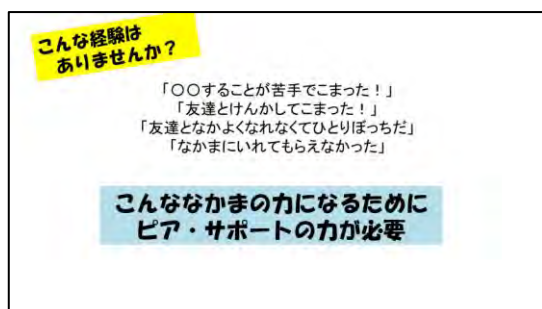
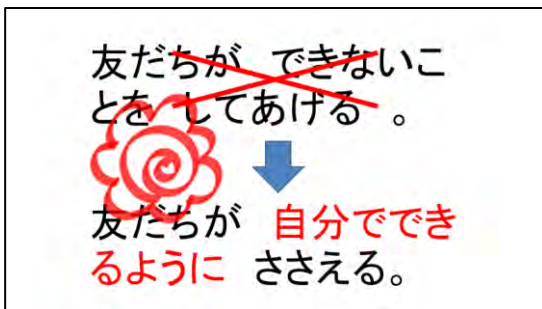


【講師を招いての職員研修】

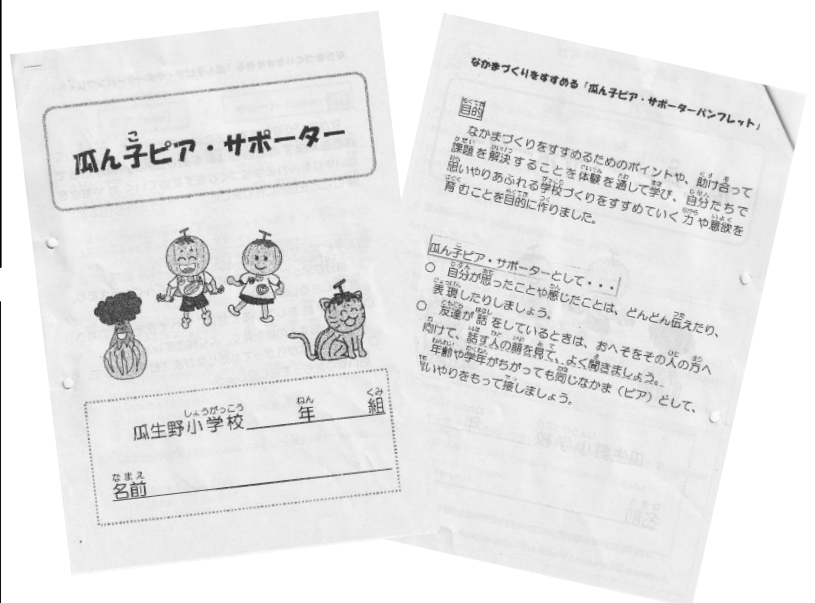
(2) 児童への働きかけ（動機付け）

ア パンフレットの作成

初めに行うピア・サポートの児童向けガイダンス用に「ピア・サポートとは何か」を学ぶパンフレットを作成し、配付した。また、パンフレットと同時に授業で利用できるプレゼンテーションを作成し、児童に視覚的に分かりやすく説明するようにした。どちらも先進校から紹介してもらったものを本校の実態に合わせて作成し直した。



【プレゼンテーションの一部】



【パンフレットの一部】

イ 全校集会による周知

生徒指導主事が、全校集会で「いのちを大切に
する教育週間」でのピア・サポート活動に
ついて講話を行い、学級単位ではなく、全校
で取り組む活動であることを確認した。この
月だけでなく、その後も集会や学期末の振り
返りの場等で、繰り返し、ピア・サポートにつ
いて触れることによりピア・サポートを意識
し、全校児童に浸透するように働きかけた。



【全校集会】

2 各学級でのトレーニング

各学級で、学級活動の中で年間3回、ピア・サポートのトレーニングを行っている。1年
目、2年目は、トレーニングは、各学級の実態に応じて、指導資料集の中から内容を選択し
た。

しかし、3年目は、職員の課題として出た「系統性を考えた指導実践が必要ではないのか」
という意見から、推進校の指定を終えてからも、教育課程の中にピア・サポートを位置付け
実践できるように、発達段階に合わせた内容を決め、年間指導計画の中に位置付けて、実践
するようになった。

○ 事例 学級活動（第3学年）

児童は前学年で、怒りのコントロールが
できない児童が多いという実態から怒り
のコントロール①『『おこる』とどうな
る？』というトレーニングを経験してい
る。そのねらいは、同じ出来事でも「怒り」
の気持ちの大きさが違うことに気付くこ
とであった。

そして、第3学年では、次の段階の怒り
のコントロール②の『『にっこり』のきも
ちになるコツ』、対立の解消「もめごとを
かいけつしよう」のトレーニングを行っ
た。ここでは、お互いにすっきり解決する
仕方を知ることをねらいとした。感想の
中でも、実際に「もめごとがあった時に使
ってみたい」等書かれており、休み時間に
学んだ言葉「どうしたの？」「どうすれば
いいかな？」を使っている児童も見られ
た。

模範となるモデルを体験することによ
り、少しずつ対人スキルを向上させるこ
とにつながっているようである。



【第3学年「もめごとをかいけつしよう」】

3 児童が主体となって取り組む活動

(1) ピア・サポート集会

推進校2年目、3年目と、計画委員会（スマイル委員会）の児童を中心に、ピア・サポート集会を重ねてきた。はじめに、プレゼンテーションを使って、ピア・サポートの考え方について児童と再確認した。その後、昼休みという場面設定で、もめごとがあった時に、どのように解決すればよいかの寸劇を委員会の児童が行い、見ている全校児童にも考えたり、学んだりする場を用意した。事前に職員間で共通理解していたこともあり、低学年では、集会が終わった後に、もう一度寸劇の動画を見せ、振り返る時間を設けたり、他学年では、実際の生活の中で、サポートした際に称賛したりする等、実態に合った振り返りを行うことができた。



【ピア・サポート集会】

(2) ピア・サポートのシンボルキャラクター

2年目には、ピア・サポートをもっと全校児童に身近に意識し、自分事として感じてもらえるようにシンボルキャラクターを決めることにした。キャラクターの図案や名前は、全校児童から募集し、計画委員会の児童が決定した。シンボルキャラクターは、シールにし、スマイル隊（遊びのリーダー）やサポート隊（あいさつ運動）として活躍した児童に配り、名札に貼ったり、あいさつが上手な児童にカードとして配ったりしている。

「みんながお互いを思いやるやさしい学校」
シンボルキャラクター決定！



【シンボルキャラクター】



【シンボルキャラクターを選定する委員会児童】

(3) ちょこっとサポート隊

11月のなかよし週間に、計画委員会の児童を中心に挨拶運動や朝のボランティア活動に取り組む児童を募った。期間中、進んで参加した児童には、シンボルキャラクターのシールを配付した。また挨拶が上手だった児童には、シンボルキャラクターのカードを配り、多目的室前の「ちょボラの学校」に掲示した。しかし、挨拶をしてカードを渡すだけの活動になり、マンネリ化が見られたため、次年度は、効果的な挨拶の仕方についてスマイル委員会の児童に考えさせたり、代表委員会の議題にしたりして、出た意見をもとに、その年のピア・サポート集会で提案した。どのような挨拶であれば、気持ちのよい挨拶と言えるのか全校で考えることができ、その後よりよい挨拶が意識してできるようになってきた。



【挨拶名人がカードを貼った「ちょボラの学校」】

(4) スマイルの日

2年目には、毎月25日付近の月曜日を「スマイルの日」と設定し、全校児童で遊ぶ日にしようとしてピア・サポート集会の中で、計画委員会の児童が提案した。

○ 瓜ん子スマイル隊

近年、感染症対策から、他学年との交流活動が減り、遊ぶ機会もなくなっていた。その状況を解消するため、上学年の児童が下学年に遊びを提案し、リードする機会を創出した。遊びをリードする上学年を「瓜ん子スマイル隊」とし、朝の時間を利用し、遊びを企画させた。

教師は見守るだけに徹し、あくまでも遊びをリードするのは、スマイル隊の児童が行うようにした。スマイルの日を始めた年は、朝の時間にスマイル隊に立候補した児童を集め、遊びを考え提案させた。

次の年は、スマイル委員会の児童が中心となって、上学年に呼びかけ、協力してくれるスマイル隊を募り、遊びを行うようにした。遊ぶ中で、上学年が上手に声掛けする姿や、トラブルを解消する姿も見られ、それを見た下学年が実践の中で学ぶよい機会になっている。

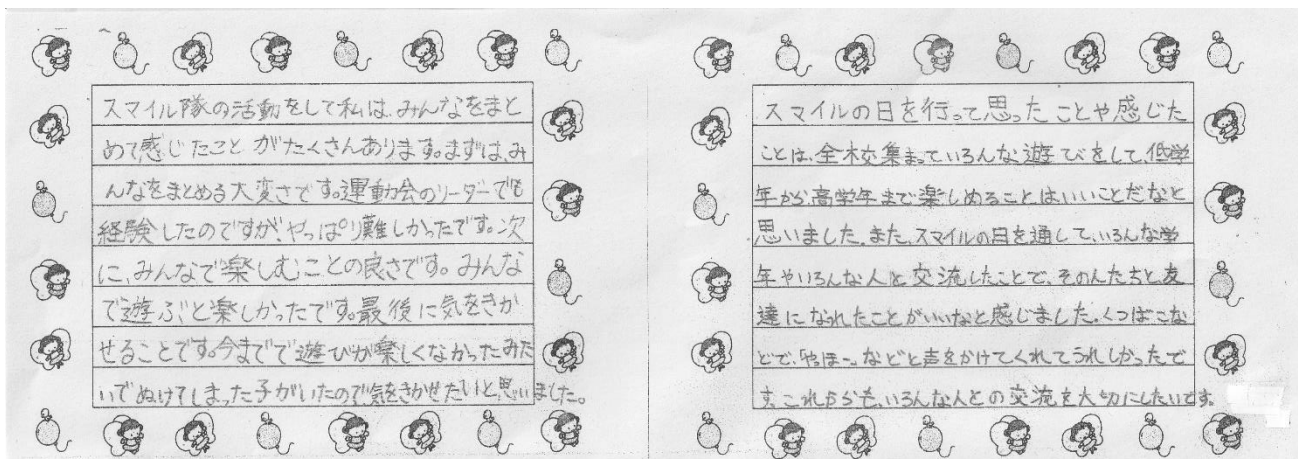
日時：(10月2日(月))



【下学年児童のスマイルの日の感想】



【遊びをリードするスマイル隊の児童】



【スマイル隊になった高学年児童の感想】

4 ピアの視点をプラスした既存の取組

推進校1年目に、職員研修で、各校務分掌部ごとに話し合う時間を設け、ピア・サポートの視点を取り入れた教育活動の洗い出しを行った。2年目、3年目では更に意識した実践が他にもできないかを全職員で考えてきた。感染症も落ち着き、縦割り清掃が再開したこともあり、上学年が下学年を上手にサポートする姿や運動会等の行事で仲間を支え合う姿が多く見られるようになってきた。この流れを大切にしながら、更にピアの視点をプラスした活動に取り組んでいきたい。



【高学年が縦割り清掃をリードする様子】

V 成果と課題

- 年々、児童を中心とした活動を重ねてきたことにより、児童にピア・サポートの意識が高まり、自然に仲間を支えたり、支えられたりする心地よさを味わう姿が見られるようになった。
- 職員研修で、ピア・サポートの基本的な考え方の確認や演習を行い、その理解を深めることにより、全職員が同じ意識で取り組むことができた。
- 全校朝会や全校集会で、ピア・サポートのガイダンスや児童が活躍する寸劇を行うことによって、児童がピア・サポートを意識して生活するようになった。
- ピア・サポート活動をパンフレットやプレゼンテーションによって視覚的に解説する方法は、児童にとって分かりやすく、効果的であった。
- 小規模校の利点として、児童が様々な場面で中心となり主体的に活動する機会を設定しやすい。スマイルの日や縦割り清掃等をとおして、高学年を中心としたサポートする姿が見られ、下学年にとってもよいモデルを学ぶ機会となっている。
- 推進校としての実践後も、職員の異動等に関係なく継続して実施できるよう、職員間の共通理解を確実にし、児童が主体となる活動が継続できるよう努める工夫が必要である。
- ピア・サポート活動は、小学校の時だけでなく、児童が将来にわたって必要な力であるので、繰り返し、継続した働きかけの必要がある。

豊かな人間関係を育むための生徒指導はどうあればよいか
～児童同士、児童と教師のつながりを意識した発達支持的生徒指導の実践～

宮崎市立住吉南小学校
教諭 児玉 佳輔

I はじめに

児童を取り巻く社会環境は大きく変化している。令和4年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」からは、小・中学校における不登校児童生徒数は、約29万9千人、前年度比で約5万5千人増加し、過去最多を記録している。また、小中高等学校におけるいじめの認知件数の推移についても増加傾向にあり、全校種で68万1千人と過去最多を更新している。この他にも学校内外で相談・指導等を受けていない児童生徒数やいじめ重大事態の件数も過去最多を更新しており、社会環境の大きな変化に伴って、からかい、悪口、暴力以外にも、SNSによる人間関係のトラブル、ネットでのいじめなど生徒指導上の諸課題の複雑化・多様化している。

昨年度、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、様々な行事をこれまで同様の形式で実施できるようになってきたが、行事以外にも他者との関わりを制限された学校生活を過ごしたことによる児童同士の人間関係、教師と児童の人間関係の希薄化した状態が未だに続いていると考えられる。

本校は、宮崎市の北東部に位置し、学校西側に日本遺産の蓮ヶ池横穴墓群の史跡公園がある。また、近くにフローランテ宮崎やフェニックス自然動物園、シェラトン・リゾート、一ッ葉の海など多くの自然があり、緑豊かで大変環境の良い場所に囲まれている。全校児童数は505名で、教育目標が「健康で豊かな心情を持ち、深く考え正しく判断できる自主性のある子どもの育成」である。教育目標以外にも、確かな人間力の向上（徳）として、南心「あたたかい心」「つよい心」「いどむ心」の3つの心をもった児童の育成を目指している。

本校の児童は、明るく活発で、元気よく学校生活を送っている児童が多い。しかし、不登校傾向にある児童の増加、心無い言葉を相手に言うてしまう児童、授業中に離席や飛び出しが見られるのが現状である。また、新型コロナウイルス感染症で広がった人と人との距離を縮めることが十分にできず、人間関係の固定化や他者に対して無関心な状態が見られることも課題である。

このような実態を踏まえ、児童が自己を見つめ直したり、自身や友達を賞賛する場面を多く設定したりすることで、児童一人一人が自己有用感を感じられるのではないだろうか考える。また、全職員が日々、児童への挨拶や声掛け、励まし、賞賛、対話、授業、行事等を通して個と集団への働きかけを行う発達支持的生徒指導を続けていくことで、自他ともに評価や称賛できる環境づくりの基盤が整い、児童同士、児童と教師とのつながりを意識することができ、豊かな人間関係を育むことにつながるのではないだろうか考え、本主題を設定した。

II 研究実際

1. いじめ根絶週間を核にした取り組み

住吉南小学校では、1年に3回いじめ根絶週間を設定しており、これは、「学級・学年の集団生活の中で、様々な体験や活動を通して、児童がお互いの個性を尊重し、思いやりの心と

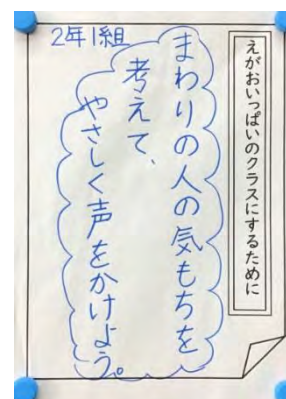
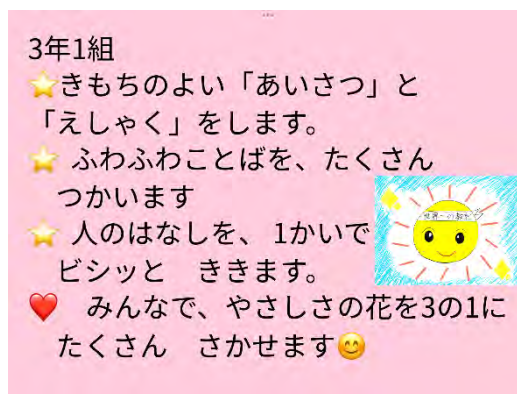
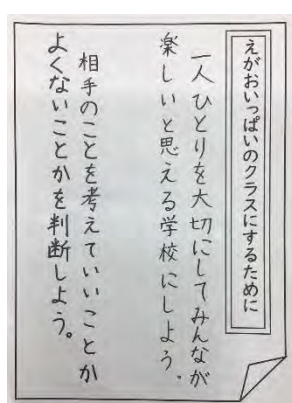
協働の精神を養う」ことを目的としている。この週間では、担任がいじめ根絶について、5つの愛（助け合い・教え合い・認め合い・励まし合い・分かち合い）を指導のポイントとして、授業や指導をするだけでなく、いじめについて各学級で考え、話し合う活動を設けたり、児童同士が称賛される活動を取り入れたりすることで、学校全体で温かい雰囲気づくりができた。以下は、3回の実践の概要をまとめたものである。

期間	実施内容
6月	○毎月行う悩み事アンケートを家庭で実施
11月	○いじめゼロ集会 ○いじめ根絶を目指したスローガン（標語）作成 ○やさしさポストの設置
1月	○校内安全見守り週間

(1) いじめゼロ集会

「笑顔いっぱいのクラスにするために」を目標に、各学級でいじめについて考えた、いじめ根絶を目指したスローガンを作成したりする話し合い活動の時間を設定した。前向きで励みとなるスローガンを考えることで、いじめを許さない環境づくり以外にも、「みんなの良いところをいっぱい見つけよう」や「自分にして欲しいことを友達にもしよう」と他者とのつながりも意識したスローガンを作成することができ、温かく、ポジティブな環境づくりにつながった。

いじめゼロ集会では、集会委員会の児童が中心となって進め、各学級で作ったスローガンの紹介や下記で紹介するやさしさポストについて説明を行い、学校全体でも、笑顔で楽しい学校生活を送ろうという環境づくりにつながった。



【各学級で考えたいじめ根絶を目指したスローガン】

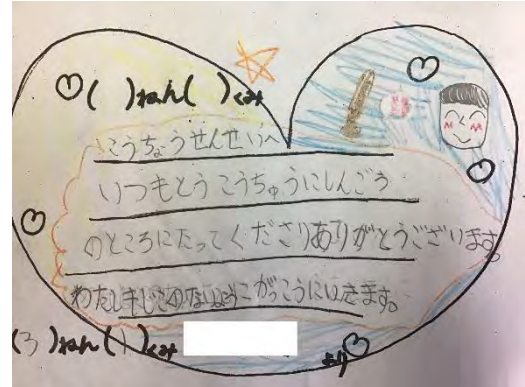
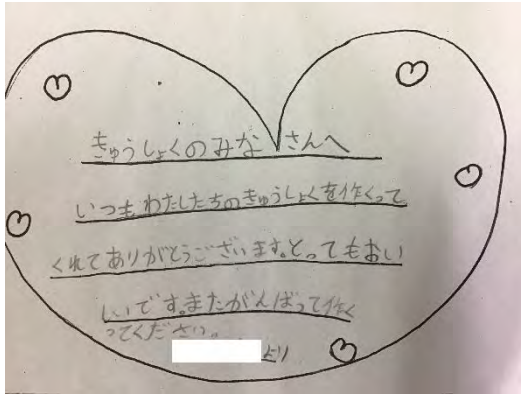
(2) やさしさポストの設置

やさしさポストの目的は、友達の優しい言葉掛け、優しい行動を進んで見つけ、その行動を紹介することで、周りの人を思いやる気持ちを持ち、みんなが笑顔になる住吉南小にしていくことである。①友だちから優しい言葉をかけてもらったり、友達が優しい行動をしたりしていたら、カードに書き「やさしさポスト」に入れる。②生活委員会が回収し、給食時間等の放送で紹介したり、友達が書いたカ



一ドが自分の手元に届いたりするという流れで実施した。

「遊んでくれてありがとう」という言葉が多く見られたが、中には、「いつも、朝のあいさつが上手だね」や「校長先生、いつも登校中に信号のところ立ってくださり、ありがとうございます」、「見守り隊のみなさん、いつもありがとうございます」といった言葉も見られた。友達の良いところを探そうとしたり、普段、なかなか伝えられない教師や地域の方々への感謝の気持ちを表したりすることで他者へ目を向けるきっかけとなった。



(3) 校内安全見守り週間

生徒指導を行っていく中で、全職員で児童を理解し、指導する体制をつくっていくことやゆとりをもって児童を観察し、積極的に称賛する場を設定するのは難しい。そのきっかけとして、全職員が全児童を対象に、よい行動をした児童に桜や葉っぱのカードを渡す取り組みを実施した。カードを貰った児童は、自分の名前や貰った理由などを記し、生活委員会が作成した模造紙に貼っていくものである。

児童の日々のよい取り組みや活動を視覚的に称賛することができ、児童の自己有用感を高めるだけでなく、児童と教師とのコミュニケーションツールとなった。担任以外の教師からカードを貰うことで、担任からさらに称賛され、担任以外の教師とのつながりを意識することができた。また、書いてある内容を真似して実践する児童、児童が教師や他者からの視線を意識する取り組みとなった。

今年度は、生活委員会と連携し、あいさつ木をつくっていこうという取り組みを実践しているところである。



2. 「チーム住南」全職員で取り組んでいる実践

全職員が同じ目標や方針に基づいて一貫性のある指導を実践することで、児童は混乱せず、落ち着いて学校生活を過ごすことができるようになるだけではなく、職員間のコミュニケーションや協力が促進され、教師自身が余裕をもって学級・学年の垣根を越えて指導できるよ

うになる。学校全体の風土が改善され、児童同士や教師と児童との豊かな人間関係を育む環境づくりの一步になるのではないかと考える。

(1) 指示カード

全体に向けて口頭による指導も必要なことであるが、教師の指示を聞いてすぐに行動ができる児童、聞くことが苦手でなかなか行動に移せない児童など様々な児童が見られる。口頭のみだと、全ての児童に対して何度も繰り返し口頭で説明してしまうことが増えたり、できていない児童について注目してしまい、指導が長引き、教師自身も余裕をもった指導ができなかったりすることがあった。



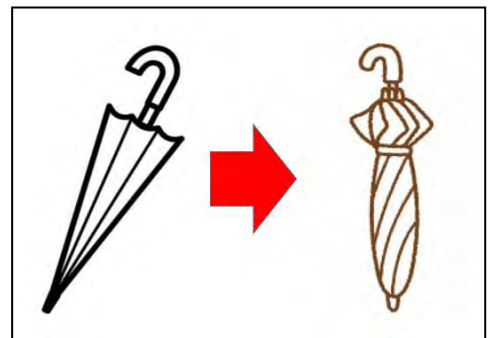
元々は教室掲示用に作っていたものだが、小さいカードにし、教師の名札につけることでいつでも指示カードを視覚的に児童に示せるようにした。

教師が無言でも指示を出すことや個別に指示を出すことができ、聞くことを苦手とする児童は、自分で何をすべきかを確認して行動できる児童が見られてきた。指示カードを見て望ましい行動が見られれば、教師が児童を褒めるポイントにもなり、教師が全体に向けて何度も同じような指示を出すことが減少してきた。

住吉南小学校では、夏休み明けから指示カードを活用した「静けさのある廊下歩行」の実施を考えている。本校では、教室移動や昼休みに廊下を走る児童や廊下が騒がしく、落ち着きが見られない状態があった。準備時間、給食準備・片付け、昼休み終了時、清掃などで教師が要所に立ち、口頭の指導だけではなく、静かに廊下歩行ができている児童を褒めたり、指示カードを示して望ましい行動に変わった児童を褒めたりなど教師が児童を褒める場として活用を考えている。静かな環境を整え、丁寧な指導を行うことにより、児童が落ち着いた廊下歩行をできるようになるとともに、全職員と児童とのつながりを意識できるような取り組みにしていきたい。

(2) その他の指示カード

雨の日の傘の片付け方に関して、傘を閉じて、ボタンを留めて、傘置き場に置くと分かってもなかなか行動に移せず、ボタンを留めずに傘を置いていく児童が見られた。雨の日のみ指示カードを示すことで、教師が指導をしなくても児童が意識して傘を片付けることが増えてきた。教師も傘を綺麗に片付けなさいという指導ではなく、指示カードをよく見ていたね、傘置き場が綺麗になってきたね、という褒める言葉が自然と増えてきた。ポスターも重要なものであるが、常に掲示している状態では、児童にとって景色の一部となってしまうため、必要な時に必要な指示カードを今後も児童に提示できるようにしていきたい。



指示カードは、多くの児童の理解促進という側面だけではなく、児童が自分で何を

すべきなのかを考え、自立して行動する力の育成や職員と児童とのつながりを意識できる有用なツールになっていると考える。

3. 生徒指導主事による実践

(1) 生徒指導主事による放送

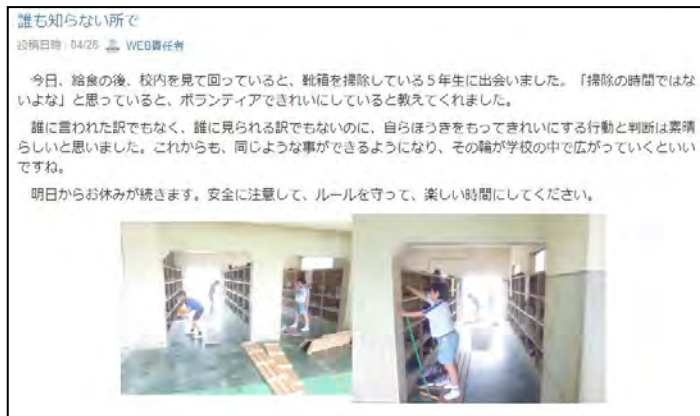
児童のよい行動を全校で共有し、児童同士が認め合う1つのツールとして称賛の場を増やすことを目的として取り組んでいる。週に1, 2回、指導だけではなく、あいさつや清掃、廊下歩行など多方面から情報を集め、児童のよい行動を給食の放送で紹介することで、児童の意識を高めることができた。

7月に6年生のあいさつがとてもよいと放送をかけたことで、他の6年生があいさつを頑張ろうとするだけでなく、他学年も真似をしてあいさつをしようとする姿が見られた。

(2) 望ましい行動の紹介

5年生での取り組みになるが、清掃を頑張っている児童や自分達の知らない場所で掃除や片付け、児童のために行動している職員の写真を児童に学年集会等で提示している。「トイレのスリッパを並べていた。清掃の時に時間いっぱい無言で清掃を頑張っている。」など担任以外の教師から褒められた内容を学年で共有した。

今後は、各学年だけではなく、毎月の悩み相談アンケート等で、望ましい行動をしている児童を紹介できる枠を作り、児童に書いてもらう。住吉南小学校のホームページでも紹介していただき、児童の意識を高めることができた。



4. 児童と地域のつながりを意識した取り組み

住吉南小学校は、登下校時に毎日、児童の様子を見守ってくださる見守り隊の皆さんや民生委員の方々の協力を得ながら、児童の指導にあたっている。

(1) 見守り隊との対面式

本校では、階段掲示板に見守り隊の方々の紹介コーナーがあり、日頃お世話になっている見守り隊の方々の顔や名前を覚えられるようにしている。

対面式は、地域への愛着や見守り隊の方々への感謝の気持ちをもつとともに、安全な登下校をしようとする態度を育むことを目的としており、対面式では、見守り隊の方々から一人ずつ自己紹介をしてもらったり、児童代表の言葉では、日ごろの感謝の

気持ちを伝えたりすることができた。

対面式終了後、学校との情報交換の時間をとり、今回は児童のあいさつについて意見交換を行うことができた。学校と地域で児童のあいさつをよりよくしていこうと連携を図れる機会となった。他にも、横断歩道を渡ろうとしていた本校の児童に気付いた運転手が止まって、その子が横断した後、車の運転手さんに深々と頭を下げて「ありがとうございました」と言った場面はとても感動したというお話を聞くことができた。児童の良さの共有も続けていきたい。



(2) 民生委員・児童委員さんとの情報交換会

民生委員さんや児童委員さんと学校教職員が情報交換をすることで、住吉南小児童が今まで以上に安全に生活できるようにすることを目的とし、夏季休業中に実施することができた。各地区に分かれて、児童の登下校時以外にも近くの広場や公園の使い方、危険箇所はないかなど学校外での児童の様子等を知る機会となっている。

Ⅲ 成果と課題

1. 成果

教師が、問題行動等の未然防止や児童生徒の成長を促す発達支持的生徒指導を率先して行い、教師と児童とのつながりを意識することで、児童同士でも互いに褒めたり、認めたりする活動が増えてきた。また、視覚的に、即時に評価や賞賛を児童に伝える方法は、児童にとって分かりやすく、効果的だったと考えられる。今後も全職員と全児童、地域の方々と豊かな人間関係を育みながら、温かい学校環境づくりに努めていきたい。

2. 課題

様々な実践を行ってきたが、不登校児童やいじめ問題の件数はなくならないのが現状であり、より一層効果的な指導の工夫をしていく必要がある。社会環境の変化による問題行動の多様化や複雑化に教師が対応できるように、今後も豊かな人間関係を育むための指導を充実させることも必要である。

「豊かな人間関係を育むための生徒指導はどうあればよいか」

～「発達支持的生徒指導」の視点をもとにした SWPBS 第1層支援の取組を通して ～

えびの市立上江中学校 教諭 山元 秀太

1 はじめに

文部科学省（2023）の報告によると、小学校における暴力行為の件数や小学校及び中学校のいじめの認知件数と不登校児童生徒数が急激に増加している。学校現場では、児童生徒の問題行動が、深刻化、多様化、低年齢化しており、児童・生徒の問題行動等の未然防止と組織的対応が求められている。また、本県においても、いじめや不登校などの課題のほか、ヤングケアラーや子どもの貧困等の社会的課題も生じており、様々な課題に応じたきめ細かな支援が求められている。

また、令和4年改訂生徒指導提要において、子どもの成長・発達を支える生徒指導への転換を目指すことが示されており、いじめや不登校、暴力行為などを未然に防止するための常態的・先行的な対応である「発達支持的生徒指導」の充実が求められている。「発達支持的生徒指導」とは、特定の課題を意識することなく、全ての児童生徒を対象に、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤となるものであり、日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び授業や行事等を通じた個と集団への働きかけが大切となる。

子ども達の問題行動を予防し、望ましい行動を伸ばす効果が実証されている枠組みとして、学校全体で組織的に行う学校規模ポジティブ行動支援（school-wide positive behavior support, 以下 SWPBS）がある。SWPBS は、すべての児童生徒を対象とした支援（第1層）、リスクがあると判断された児童生徒を対象とした支援（第2層）、個別の対応を要すると判断された児童・生徒を対象とした支援（第3層）を配置し、すべての児童生徒の QOL（quality of life）向上を目指すものであり、重きを「発達支持的生徒指導」においている。

本県においても宮崎県教育振興基本計画（令和5年策定）の取組の一つに SWPBS の推進が取り上げられている。SWPBS の有効性については、国外を中心に検証が進んでおり、近年、日本においても SWPBS の実践研究が見られ始めている。問題行動の減少や適応的な行動の増加、不登校、学校肯定感、及び自己肯定感の改善、友人関係の改善が見られたと報告されている。

2 本校の主題研究について

令和5年度末の職員研修内の協議で、本校における生徒の実態は、素直で明るい児童・生徒が多いものの、自己肯定感の低さ、耐性・適応能力の低さ、受け身で指示待ちであることが課題としてあげられた。本校の生徒の実態から、本校の教育目標である「主体的に活動するたくましい上江っ子の育成」を目指し、令和6年度の研究主題を「SWPBS 第1層支援の実践による主体的に取り組む児童・生徒の育成」とした。

なお、SWPBS 実施については、「探索（SWPBS が学校に必要なかどうか検討する）段階」、「導入（SWPBS 実施の準備を進める）段階」、「試行（導入段階で立てた計画を試行する）段階」、「完全実施（試行した計画を見直し、繰り返し取り組む）段階」の4つの段階に分かれており、本校においては、令和5年度を「探索・導入段階」、令和6年度を「試行段階」、令和7年度を「完全実施段階」として、SWPBS の実践を計画している。

3 研究の目的

本研究では、「発達支持的生徒指導」の視点をもとに SWPBS 第 1 層支援を実践し、その効果と豊かな人間関係の育成への妥当性、今後の課題について検討することを目的とする。

4 研究方法

(1) 本校生徒の実態

本校の所在地であるえびの市は、人口約 17000 人、本校は施設一体型小中一貫校で、今年度全校生徒 38 名の小規模校である。市の北部には九州山脈、南部には日本で最初に指定された国立公園であり、霧島ジオパークの一部でもあるえびの高原をはじめ、韓国岳などを含む霧島の山々が連なる。さらに市の中央部を川内川が流れ、田園風景、湧水池など自然の魅力は数多く、市内のあらゆる場所で四季折々の表情を楽しむことができる。そのような環境で育った生徒は、明るく活発で、元気よく学校生活を送っている。

本校の生徒は 1 年生 13 名、2 年生 10 名、3 年生 15 名、計 38 名であり、三つの通常学級、二つの特別支援学級（情緒学級 1・知的学級 1）がある。本研究では「授業支援」と「日常支援」を行い、授業対象は中学部 3 年生 15 名、日常支援対象は中学部 1、2、3 年生 38 名である。

(2) SWPBS について

SWPBS は①目標の設定と共有、②計画の具体化、③実行、④改善という流れで行われる。令和 5 年 3 月より、SWPBS 推進委員（研究主任）が中心となり、全職員を対象に、SWPBS に関する研修を行った。具体的な内容は、SWPBS における多層支援モデルに関する概説、国内外で報告されている SWPBS の前例とその成果、第 1 層支援の具体的な手続き（ポジティブ行動マトリクスの作成、行動支援計画の作成と実行など）、チームアプローチの必要性、行動観察と記録の必要性についてであった。

本校の主な SWPBS 実践の流れを資料 1 に示す。なお、本研究での「授業支援」は、令和 6 年 6 月に実施しており、本校で予定されている研究授業の時期（9 月～12 月）よりも早期に行っている。

ア 目標設定と共有

生徒たちの課題と目標行動を明らかに

時期	内容
【探索・導入段階】 R5ゴール:マトリクス検討、推進チーム立ち上げ	
R5 12月~3月	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修(12/25,2/19,3/12)・研究推進委員会(3/11) 生徒アンケートアセス(ASSESS)実施 2,3月授業参加行動の記録 行動マトリクス検討 校内支援体制整備(TFI)の確認
【試行段階】 ゴール:マトリクス完成・周知、職員の実践検討	
R6 4月~7月	【4月】 <ul style="list-style-type: none"> 主題研及びSWPBSの説明、行動マトリクス検討、集会にて生徒行動マトリクス周知(生徒会執行部) 生徒アンケートアセス(ASSESS)実施 主題研①(理論研修:SWPBSの概要、応用行動分析学のABC分析、データについて)
	【5月】 <ul style="list-style-type: none"> 研究推進委員会(本年度の内容及び計画の確認、ASSESS及び授業参加行動の確認) 主題研②(理論研修:行動の強化と弱体化、本年度の内容及び計画の説明、主題研究の班の希望調査) 研究推進委員会(校内支援体制整備の確認、SWPBS取組の報告と今後の方針の検討)
	【6月】 <ul style="list-style-type: none"> 主題研③(研究授業の説明、班のメンバー発表、班長選出、班ごとで行動支援計画作成)
	【7月】 <ul style="list-style-type: none"> 研究推進委員会
【夏季休業】	
<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導研修(理論研修:応用行動分析学、SSTについて) 夏季休業中主題研④(研究授業事前研) 	
【試行段階】 ゴール:職員の実践、校務分掌の取組開始、生徒会関与)	
R6 9月~3月	【9月】 <ul style="list-style-type: none"> 研究授業一人1回実施 9/18(水)研究推進委員会
	【11月】 <ul style="list-style-type: none"> ★中学部宮崎県生徒指導連絡協議会研究発表会発表⇒事前に生徒アンケートアセス(ASSESS)実施 11/20(水)研究推進委員会
	【12月】 <ul style="list-style-type: none"> 12/25(水)主題研⑤(行動支援計画の確認・修正、研究授業事前研、事後研)
	【2月】 <ul style="list-style-type: none"> 主題研⑥(研究授業事後研、まとめの作成)研究成果の作成、行動マトリクス修正 生徒のアンケートアセス(ASSESS)実施
	【3月】 <ul style="list-style-type: none"> 主題研⑦(研究のまとめ:本年度の成果と課題、行動マトリクス修正、職員アンケート)
【年間を通して】	
<ul style="list-style-type: none"> 研究推進委員会(推進チーム)から全職員への取組、成果の報告(職員連絡会、ハートフル委員会等の時間の活用) 児童生徒に適切な行動を教え、称賛等を行う(日常的に、校務分掌、委員会活動、児童会活動、生徒会活動を関連させて) SWPBSの実行度評価及び校内支援体制の評価(推進チームが夏季休業、秋季休業、冬季休業、年度末で実施) 	
【完全実施段階】 R7ゴール:児童会・委員会・保護者関与	
R7 4月~3月	<ul style="list-style-type: none"> 1年間の流れはR6と同様 児童や保護者、地域住民の意見を反映させた形での実践を行う。 生徒会の積極的な関与

資料 1 本校の主な SWPBS 実践の流れ

するため、学力調査、児童生徒アンケートASSESS等を基に生徒たちの実態を分析した。資料2は職員研修で明らかになった本校の課題及び目標である。

また、本校の課題を解決するための教師・生徒の共通目標であるポジティブ行動マトリクスを作成した(資料3)。ポジティブ行動マトリクスとは、SWPBSの第1層支援において教職員が全校生徒に期待される目標行動を選定するために用いる表である。本校でポジティブ行動マトリクスを作成するために、SWPBSに関する研修を2回行った。これらの望ましい行動を増やすために「引き出す工夫」「認める・ほめるための工夫」を授業や生活の中で行っていく。また、マトリクスは生徒会とも検討した。

【1番解決したい課題】	【目指したい姿(目標・成果)】
○自己肯定感の低さ	○自分が主役、子どもが主体的に活動
○耐性・適応能力の低さ	○もっとよくなりたい！よりよくしたいという意欲
○受け身で指示待ち	○自分の想いを伝える

資料2 本校生徒の課題と目標

		For me	For you
授業	伝える		・自分の考えを伝えよう。 ・人に分かりやすく教え合おう。
	聞く	・分からないところを人に聞こう。 ・先生の話をよく聞いてメモを取ろう。	・リアクションしよう。
生活		・自分の仕事をやりとげよう。 ・ルールを守ろう。	・一日一善(人の役に立とう)。 ・教室を整えよう。
コミュニケーション		・自分のよさを生かそう。	・先にあいさつをしよう。 ・人の良いところをほめよう。

資料3 ポジティブ行動マトリクス

行動支援計画表 【授業支援】

行動支援計画表		
ステップ1:目標行動を決める(ポジティブマトリクスの中から)		
人の良いところを褒めよう(for you:コミュニケーション)		
ステップ2:児童生徒に伝える「目標行動を行う理由」を考える		
<ul style="list-style-type: none"> ・人から褒められると気持ちが良いから。 ・褒めた人も気持ちが良いから。 ・友達との仲も良くなって、また人を褒めようと思えるから。(良いサイクルができる) 		
ステップ3:目標行動の具体例を考える		
よい例	悪い例	等
<ul style="list-style-type: none"> ・人の良い行動を見つけ、発信できる ・自分以外の仕事をやる ・相手ができないことをやってあげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の良いところが見つけられない。 ・人のためになる行動が分からない。 ・人のためになると分かっているけど行動できない。 	
ステップ4:教職員全体で目標行動を増やすための具体的な支援を計画する		
目標行動のきっかけ 「引き出す工夫」 (児童生徒が何をすべきか分かりやすい状況)	目標行動 (生徒ができるようになるための確認)	目標行動の結果 「ほめる・認めるための工夫」 (生徒が行ったことにメリットを感じやすい結果)
<ul style="list-style-type: none"> ・事前にグループをつくり、行動を観察させる。 ・「言葉のプレゼント(学習シート)」を使用する。 	人の良いところを褒めることができる。 (「言葉のプレゼント」に記入し、読み合う。)	<ul style="list-style-type: none"> ・良いところを見つけられたことへの賞賛 ・「言葉のプレゼント」に対する生徒コメント
ステップ5:教職員全体で児童生徒の目標行動の変容を評価するための記録方法を計画する		
<ul style="list-style-type: none"> ・「言葉のプレゼント(学習シート)」 ・「上江ツリー」への取り組み状況の変化 		
ステップ6:生徒全体や教職員全体に支援結果をフィードバックする方法を計画する		
<ul style="list-style-type: none"> ・学級通信にて学習シートの記録を記載する。 ・「上江ツリー」への取り組み状況の変化を朝の会や帰りの会等でフィードバックする。 		

イ 計画の具体化

生徒へ具体的な目標をどのように教えるのかを計画した(資料4)。授業、日常における支援計画については、大久保ら(2020)により考案された行動支援計画表を参考にした。また、本研究では、豊かな人間関係を育む生徒指導の在り方を究明するため、人間関係構築要素に近いコミュニケーションFor you「人のいいところをほめよう」に着目した。

ウ 実行

【授業支援】

6月25日に授業を行った。題材は「言葉のプレゼント」を扱い、「自分や友達のよさについて伝えることができる」ことを目標とした。授業内で個々の考えを認め、発表内容を誉めながら、実践への意欲を喚起させることを中心支援として行い、終盤には生徒個人の感想を記入させ、発表させ、感想の内容を帰りの会で紹介、学級通信へ掲載するなどして、授業内で見られた褒め言葉等が、日常生活でも発信されるような手立てを行った。

行動支援計画表 【日常支援】

行動支援計画表		
人の良いところを褒めよう(for you:コミュニケーション)		
ステップ2:児童生徒に伝える「目標行動を行う理由」を考える		
<ul style="list-style-type: none"> ・人から褒められると気持ちが良いから。 ・褒めた人も気持ちが良いから。 ・友達との仲も良くなって、また人を褒めようと思えるから。(良いサイクルができる) 		
ステップ3:目標行動の具体例を考える		
よい例	悪い例	等
<ul style="list-style-type: none"> ・人の良い行動を見つけ、発信できる ・自分以外の仕事をやる ・相手ができないことをやってあげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の良いところが見つけられない。 ・人のためになる行動が分からない。 ・人のためになると分かっているけども行動できない。 	
ステップ4:教職員全体で目標行動を増やすための具体的な支援を計画する		
目標行動のきっかけ 「引き出す工夫」 (児童生徒が何をすべきか分かりやすい状況)	目標行動 (生徒ができるようになるための確認)	目標行動の結果 「ほめる・認めるための工夫」 (生徒が行ったことにメリットを感じやすい結果)
<ul style="list-style-type: none"> ・3年学級委員長が「上江ツリー」の説明と呼びかけを全学年に行う。 	「上江ツリー」による「人の役に立つ」・「人への褒め言葉」などの発信。	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週の状況を放送で賞賛する。 ・朝の会や帰りの会での賞賛。
ステップ5:教職員全体で児童生徒の目標行動の変容を評価するための記録方法を計画する		
<ul style="list-style-type: none"> ・「褒め言葉」を使ったらカードに書き、廊下に掲示されているポストに投函する。 		
ステップ6:生徒全体や教職員全体に支援結果をフィードバックする方法を計画する		
<ul style="list-style-type: none"> ・「褒め言葉」が使えた際にすぐに褒める。 ・帰りの会で、生徒の「褒め言葉」を学級全体にフィードバックする。 ・ポストに投函されている「褒め言葉」を掲示し、その成果を褒める。 		

資料4 行動支援計画表の例「人の良いところを褒めよう」

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点
導入	1 本時のねらいを理解する。 「自分や友達を肯定的に見つめ、長所を探す」ということを伝える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">自分や友達によさについて伝えることができる。</div>	・ 教師の話聞きながら、行事や日常のことを想起する。
展開	2 ウォーミング・アップ 例示する人物の長所を考え、発表し合う。	○ 生徒がよく知っているスポーツ選手(芸能人)を例に挙げる。
	3 自分の良さについて考え、ワークシートに記入する。	○ 「長所」「短所」ともに個性であるが、本時は「長所」に着目させる。
展開	3 エクササイズ「言葉のプレゼント」を行う。(3人組) (1)相手のよさを表す言葉とその理由を書く。 (2)「言葉のプレゼント」を交換し合い、読む。 (3)感想を書く。	☆ 言葉が浮かばない生徒には、日常生活や行事、係活動などの項目を例示し、いろんな角度から友達によさを見つけれられるようにする。
評	自分や友達にはどんなよさがあるのかについて真剣に考えたり、前向きに受け止めたり、積極的に伝えようとしていたりしている。	
終末	4 振り返りカードに、今日の授業で考えたこと、感じたことを記入する。 5 人の良いところを見つけ、褒めることを今後も続けていけるようにする。	○ 数名の生徒を指名し、発表させる。 ○ 個々の考えを認め、発表内容を誉めながら、実践への意欲を喚起させる。 ☆ 人の良さや、褒め言葉を掲示している「上江ツリー」についても触れ、実践への意欲をかき立てる。



資料5 授業指導案 「人の良いところを褒めよう」

資料6 授業の様子

【日常支援（上江ツリー）】

「上江ツリー」とは、人の役に立てたことや人の良いところ、良い行動、褒め言葉などを掲示し、期待される行動が見える化した取り組みである。(資料7)

「上江ツリー」は3年生徒発案のもと実施の理由や呼びかけを放送で全校生徒へ行い、教室横の廊下の壁に掲示した。「褒め言葉」を書いたカードをポストへ投函し、そのカードを掲示した。また、教員による日常的な称賛と、朝の会、帰りの会等での言葉の紹介等を行った。



資料7 日常支援 「上江ツリー」

(3) 行動評価方法

ポジティブ行動マトリクスの中から実際に支援計画を立てた目標行動について、「生徒の感想記述」および、学校適応感尺度「ASSESS (アセス)」により、評価・分析する。学校適応感尺度「アセス」とは、子どもたちの学校における適応感を多面的に測定するためのアンケートである。全体的な適応感である生活満足度や、教師や友人からのサポート、向社会的スキル、学習適応、さらに被害感がないかという非侵害感の6つの観点から構成される。

4 結果および考察

(1) 研究授業における生徒の感想から見る変化

生徒の感想から、人を褒めることの喜びと、今後の生活で人の行動に着目し、認めていこうと

する意欲が高まったようである。ポジティブ行動マトリクスにおける「人の良いところをほめよう」について、その行動を行う理由と意義について理解できている様子が見えてくる。

今日の活動をして、最初は自分の長所があまり出てこなかったけど、友達から自分の長所を聞いて、これからも明るく楽しんでいこうと思った。また、友達の長所を考えて、伝えたら、嬉しそうだったので自分もとても良い気持ちになりました。
自分が思っている長所も出たけど思っていない長所もでた。相手の良いところは伝える方も伝えられる方も嬉しくなったと思う。今日言われた良いところはこれからも続けていきたい。
人の良さを伝えるのはやはり難しいと思った。今日、人の良さや自分の良さについて考えるときに迷うことがあったので、これからはもっと自分と向き合って、人の良さも見付けた上で、自分の長所を伸ばし、新しく見付けていこうと思った。
自分で自分の長所を見つけるのも良いけど、友達に自分の長所を見つけて、書いてもらったのも嬉しかったし、友達から見て、どう思われているのかも知れてよかった。また、友達にその言葉を読んであげたときの表情も見ることができたのでよかった。他の友達の長所も伝えていきたいです。
はじめ、自分の長所を考え、ワークシートにむかったけど、なかなか自分の手が動かなく、今までの自分の行動を見直したりしていました。その後に、人の良さを考えると、自分よりも相手の長所をスラスラ書けました。相手の長所を本人に伝えることは少し勇気が必要だったけれど、相手に伝えた後に相手の表情を見ると、ニコニコしていて、この活動をして良かったと感じました。また、改めて発見した部分もあったので、今後の自分にしっかりつなげたいです。
自分の長所を改めて考えられた。普段言えないことを言えて、良い授業だと思った。言葉のプレゼントをもらい、うれしかった。今後ももっと長所を伸ばして、短所を長所に変えたい。
人の良さを相手に伝えることができ良かったと思った。友達の良さを見付けるのは、簡単だったが、自分の良さを見付けるのは難しかった。だけど、友達から言われた自分のよさを聞いて、新たに知ることができた。今後も今日伝えていない友達の良さを伝えたいと思った。

(2) ASEESS (アセス) による生徒の変容

表1に3年生、表2に全学年のASSESS分析の結果を記した。「生活満足度」、「友人サポート」、「非侵害的関係」の観点で事前よりも高い数値を示した。これらの観点は、「豊かな人間関係を構築する」上で必要な観点であり、本テーマにおいて関係が深い。

したがって、本研究における授業支援・日常支援が生徒たちの望ましい行動の増加に伴う、影響であることが考えられる。また、「向社会的スキル」については、事前に比べ低い数値を示した。「人の良いところ」を褒めようとする取り組みの中で、生徒らが自身の社会的スキルを見つめ直す機会にもなったのではないかと考える。今後、社会的スキルの向上に向けた支援・指導の必要性が示唆された。

表1 ASSESS分析の結果(3年生)

適応次元	事前 4月上旬	事後 6月下旬	前後差
生活満足感	58.7	63.0	+4.3
教師サポート	68.3	68.7	+0.4
友人サポート	61.3	62.6	+1.3
向社会的スキル	61.8	59.2	-2.6
非侵害的関係	62.9	66.8	+4.0
学習的適応	54.2	58.0	+3.8

表2 ASSESS分析の結果(全学年)

適応次元	事前 4月上旬	事後 6月下旬	前後差
生活満足感	56.4	59.5	+3.1
教師サポート	62.4	65.8	+3.4
友人サポート	57.8	60.5	+2.7
向社会的スキル	59.7	58.7	-1.0
非侵害的関係	62.7	62.7	0.0
学習的適応	51.5	54.5	+3.0

5 まとめと今後の展望

本研究では、「発達支持的生徒指導」の視点をもとに SWPBS 第1層支援を実践し、その効果と豊かな人間関係の育成への妥当性、今後の課題について検証した。結果として、全体的に生徒の望ましい目標行動（人の良いところをほめる）が増加し、「生活満足度」、「友人サポート」、「非侵害的関係」の平均値が上昇した。このことから、「発達支持的生徒指導」の視点をもとにした SWPBS 第1層支援は「豊かな人間関係の育成」に有効であると考えられる。

SWPBS の実施の流れにおける①目標の設定と共有②計画の具体化③実行④改善のカリキュラムマネジメントの過程は、職員全体で行うため、より組織的な指導・支援が期待できる。本校における SWPBS の取り組みは、本年度を試行期間とし、完全実施は来年度になるため、本年度は SWPBS の理論研修と実践の流れを一通り試行していくことに重きをおいた。来年度に向けて、課題の明確化、生徒の生活に即した目標の設定と共有、波及しやすいマトリクスの作成が必要である。さらに、今後生徒発案の取り組みを増やすなど、子どもたちの積極的関与が望まれる。

本研究では、先行的に研究授業を行う形となった。生徒指導の視点を授業にも取り入れていくことの重要性が生徒指導提要において示唆されているため、日常的な授業における SWPBS の視点の取り入れ方を検討することも今後の課題であろう。

また、教職員にかかる負担がより少なくてすむよう、新たな取り組みを増やすのではなく、今行っている取り組みにマトリクスの目標行動の視点を取り入れた、計画、実践、振り返りなどを行うことも必要になると考えられる。

アメリカでは既に 26,000 校以上が SWPBS を導入しており、問題行動の減少や学力の向上、学校風土の改善などの効果が示されており、SWPBS の導入・実行・持続を支える法・州・学区からのサポートも存在する。

日本においては、アメリカと比較すると法的な SWPBS の位置づけや SWPBS 実践向けの人的・時間的・経済的資源の活用等が十分になされていない現状がある。SWPBS 実践における諸研究においても SWPBS 実践についての課題が多岐にわたって示されている。主には、SWPBS の導入校数の少なさを理由として、実践成果や継続性のためのデータが不足していることや実質的な実践者である教師の支援行動の実行とフィードバックを受ける機会が少ないことも挙げられている。

また、SWPBS を法的に位置づけていく前段階として、各都道府県等の教育振興計画に SWPBS を位置づけ、組織的に実行していく必要性も挙げられているが、本県では既に県の教育振興計画に SWPBS を位置づけ、県内の普及が目指されている。

本研究を通して、まだまだ実践例の少ない SWPBS ではあるが、全職員で可能な限り、SWPBS を取り組んでいくことは、子どもたちの豊かな人間関係を育む一助になり得ることが示唆された。

今後、本校のみならず、えびの市内、市外の学校にも SWPBS 実践が波及され、取り組みがスムーズに行えるために、本校でもさらに SWPBS の実践に力を入れていきたい。

6 引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2022)「生徒指導提要」 p13-38
- 2) 宮崎県教育委員会(2023)「宮崎県教育振興基本計画」 p12-13
- 3) 大久保ら(2020)「公立小学校における学校規模ポジティブ行動支援(SWPBS)第1層支援の効果と社会的妥当性」 p224-256